

前回検討会の議論のポイント

- 1 測定方法の比較について
 - (1) 測定結果からは、どのような測定方法であってもそれほど差はない。粉じんがある程度拡散して飽和状態となっているため、それほど差がないのではないか。
 - (2) 定点測定と個人サンプラーによる測定を組み合わせることも考えられるのではないか。
- 2 分粒装置及び粒径について
 - (1) 吸入性粉じんを測定対象とすべき。
 - (2) 分粒装置については、インパクト方式はすぐにオーバーフローするので、サイクロン方式を使用すべき。
- 3 質量濃度変換係数（K 値）について
 - (1) 昨年度実施した吸入域の粉じん濃度の測定結果から、K 値を統計的に定めることは可能ではないか。
 - (2) 過去の文献から K 値の分布を調べ、上位 80%の値で決めるといった方法でも、十分な管理ができるのではないか。
- 4 個人サンプラーによる測定の実行可能性について
 - (1) 他の測定と組み合わせ、頻度を下げること検討すべき。
 - (2) 測定器を 1 種類に限定し、作業者の負担を軽くすべき。
 - (3) 作業員には、高価な測定器を壊すことを心配する負担感がある。
- 5 定点測定の実行可能性について
 - (1) 吹きつけ作業の場合は、切羽付近でも測定可能だが、発破、掘削、ずり出し作業では切羽付近での測定は困難である。
 - (2) 昨年度の吸入性粉じん濃度の測定結果では、切羽からの距離による大きな変動は認められないため、切羽付近での測定にこだわらず、管理しやすい場所で測定すべきではないか。
- 6 遊離けい酸含有率について
 - (1) じん肺のリスク評価の観点から、遊離けい酸含有率の測定は重要である。
 - (2) 定点測定では、ずり出し以外では十分な量をサンプリングできなかった。岩石そのものを粉砕して再発じんしたものを採取するなどの方法があるのではないか。吹きつけ時は十分な量をサンプリング可能である。
 - (3) 過去の文献から遊離けい酸含有率の分布を調べ、上位 80%の値に決めるような方法もあるのではないか。